

**留学先国名** : スウェーデン

**留学先学校名** : リンネ大学

**留学期間** : 平成 27 年 8 月 30 日 ~ 平成 28 年 6 月 30 日

平成 27 年 8 月、私は大阪教育大学のプログラムの一環で、スウェーデンのクロノベリ県ベクショー市にあるリンネ大学に 10 ヶ月間交換留学生として派遣されました。私はベクショー中央駅付近にある学生寮を借りて生活しました。学生寮はワンフロア 20 人程度で、キッチンとリビングが共有でした。一緒に住んだ仲間は、日本、アメリカ、カナダ、韓国、中国、ウガンダの 6 ヶ国から来た留学生達でした。

言語の違う仲間たちとの集団生活は、私にとって生まれて初めての体験でした。言語が違う場合は、自分の言葉を伝えようとしても、そのうちの七割しか通じないということが良くありました。英語力は留学でも通用するぐらいに鍛えたつもりでしたが、発音が悪かったり、言い回しが思いつかなかったり等、苦戦することもよくありました。しかし、集団生活なので、通じなかったではトラブルのもとになってしまいます。そこで、定期的に全員が集まり、諸注意事項について確認するフロアミーティングをおこないました。私は、このフロアミーティングの中身を考えることにしましたが、やはり自分の英語力ではうまく通じるかどうか不安でした。しかし、アメリカ人留学生が私にとっても良いアドバイスをしてくれたおかげで、無事にミーティングで注意事項の内容をすべて伝えることが出来ました。おかげで、私の住んでいたフロアは、学生寮の中で最も綺麗で快適なフロアとして知られていました。別れ際に同じ階に住んでいた友人が、「あなたのおかげで快適に住むことが出来た」と言ってくれた時はとても嬉しかったです。

異国での長期間の生活となると、やはり食生活の差異は気になりましたが、十分余裕を持って乗り切ることが出来ました。大きな理由の一つは日本米が手に入ったことです。日本産ではなく、オーストラリア産でしたが、これを友達とお金を出し合うことによって購入していました。値段は日本とほぼ変わりありませんでした。野菜類はむしろ日本より安いぐらいでしたが、そのかわり肉類が日本より高かったため、一人で充実した食生活を送るのは困難でした。そこで、同じ日本人留学生と三人で夕食のお金を出しあうと約束し、かなりの食費を抑えました。醤油なども手に入ったので、日本食を作ることも可能でした。

留学先での勉強ですが、多文化共生社会について学ぶということを当初の目標にしていたので、それについての学習をする機会はとても多かったと思います。私がスウェーデンを留学先に選んだ理由としては、スウェーデンはヨーロッパの中でも 1960 年代という比較的早期から移民の受け入れ政策を開始しており、かつスウェーデンはアメリカやカナダのように、最初から移民によって構成された国ではなかったからです。早期から受け入れていたために、多文化共生社会を目指す上で、どのような課題が浮かび上がり、それをどのように解決してきたのか、また未だに解決できていないのかを考えるには適していると考えました。大阪教育大学のプログラムの一環でしたので、私は現地の義務教育学校で実習を行う機会を得ることが出来ました。スウェーデンの学校では様々なバックグラウンドを持つ子供達がいまいました。中にはシリア難民の子供もいましたし、兄妹を内戦で亡くしているなど、つらい体験をしてきた子供達もいました。スウェーデンの学校で

は、そのような子供達をどのようにケアしていくのかということも課題として残っていることを学びました。また、多様なバックグラウンドを持った子供達が集まっているが故に、子供達の文化的な衝突をいかにして防ぎ、解決していくのかというものを、スウェーデンのカリキュラムから学ぶことも出来ました。

また、私は学童保育のボランティアを行う機会を与えていただきました。スウェーデンでは学校に低学年の自分の子を親が迎えに来ることも良くありますが、両親が共働きなどで帰るのが遅い為、学校で待機する子供達も一定数いました。私は、彼らのために出来ることはないかと考えました。日本人で出来ることといえば、やはり折り紙なのではないかと思いましたが、当初子供達に折り紙でそんなに喜んでもらえるかどうか不安でした。しかし、折り紙をおると子供達は喜んで近づいてきて、もっと様々なものを作って欲しいとお願いされました。ハロウィンだったので、折り紙のランタンなどを折ったりもして、子供達に喜んでもらえました。異なる文化のポジティブな面に触れることによって、子供達の異文化に対する態度が良い方向に向かっていくのではないかと考えました。

留学で得た多文化共生社会に対する知見は、卒業論文に活かそうと考えています。また、秋に学校で留学の成果の発表を行うことを予定しています。留学経験で、アカデミックな知識や技能だけでなく、人間として異文化の中で生きるという生きる力を獲得できたと考えています。留学は多くの楽しみとともに、同じ程の苦勞をするものです。ですが、楽しみと苦勞からもたらされるものは、これからの人生において、大きな武器になっていくと考えています。